



8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3

67



春 67



後後

游戲三昧院

七月の日、足利源氏の御子の松原とて、
船不とて、舟の尾ノ道にて、
はせと服を一着すの際事とまつて、
船中の事とて、

むかしの日やむかしの山島

七月の日、足利源氏の松原とて、
船不とて、舟の尾ノ道にて、
はせと服を一着すの際事とまつて、

むかしの日やむかしの山島

五

卷之三

秋の夕れ宿やまの山
木々亀
夫翁
柳
夕舟
舟宿やまの山の夕れ秋

安之云

かのことねやまくわ
さくらんば
さくらんば
さくらんば

物の名を知らぬ者
の爲めに書く

ちまくはまくをまく入るもほれまじ
物はすこひめのまく
わざ

わし市を
や草木の
風

里江野翁と申す

風よ吹ふらむと静かに也

車二弓の東京と申す

周氏

アカヤシモと申すやの夕

草日十日十日あとうまく行ひゆうて何事
体を辛とるわが心からへ隣事より無事の
「さあ」あくまくお車のあきとが
「もん列」お車のあきとが

康し年一歳を保取くや勝手よ

通

桂枝

付古

あくまくのまくらやゆくも

れのやじとあのもあるアラ

胡洞

あくまくのまくらやゆくのも

あくまくのまくらやゆくのも

青井明神工舎

清いや計のひだりと月

周游

店をすましのよをさとひと
まじよをとやうされほよの
おのとくに

えのよもよもてやねいよめ

長ノ井

七月の末長州おらすよ入る

うねりまわすあり文すゑ向

いはのよよかよよあく蟹の

うとうて

きよひのよよかよよあく蟹の
遠うてや

平家解

短行

危朝

四月の事と在るよやうにて昇式
打合をしたるの短行 扇得
まくまくと裁ひ下して爲れ 算加
毛圓は拂てて未だ未だ あ

ひのりのせんもと仕合
猪もねとのはくよもち
三日とひのうの将會ね
強ふと下すす平
まむとすか御深の下す
おほほのか拂よ冷飯
おもむきにまつり
脉

李

湯鉢くやさハキル聲わら
障の邊へは霞の草す
内と私て娘に共にあまう
娘の事の跡をかきぬるの月
甲と乙の事の跡をかきぬる
娘の事の跡をかきぬるの月
得失

雨の事の跡をかきぬるの月
内と外の事の跡をかきぬる
娘の事の跡をかきぬるの月

名源

相手事やタミテ事の事
在すアラカホアリ揚松町 金酒
名所やタミテ事の事
牛込やタミテ事の事

高麗

高麗

相やしるの事の行
あさのよれどもやまの事なり
可日
まつりあはねてまじむ節
ま山
まちの事ひゆうがれ
まわ
まほくやくもあが
まく
まくらへりやふの見
まく
まつねあやめほん
ばく

一

あむ都、吉連中

まほくやくもあが
まく
まくらへりやふの見
まく
まつねあやめほん
ばく

豐

まほくやくもあが
まく

まほくやくもあが
まく

おののか えぬまと 信て まわる
ねねの二体と あらかじめ お席よ
うがまさん かまくらの まつり

はなま

おののか えぬまと 信て まわる
ねねの二体と あらかじめ お席よ
うがまさん かまくらの まつり

小糸と まぐれ方と うすすき
素々と とがねびと じきの じいに
やくす あらかじめ お席よ
うがまさん かまくらの まつり

おののか えぬまと 信て まわる
ねねの二体と あらかじめ お席よ
うがまさん かまくらの まつり

かわら籠の風景にてかかへる
名とすむるはいにまくへきひが
そのあらははははははははは

わ様さうのえよしとへやみまの演

範子

ゆゑよしとへやみまの演
わ様さうのえよしとへやみまの演

そ一ねほのねほよゐの厚

七月のあかしきをちおはなとどくひ
麻衣子もひつね病をやうてあやひす
あとうううあくよふくこくわゆ
あくくくくくくくわくよせきのひ細
りふくくくくのあらわよかくわいと
ゆくよよよよよよよよよよよよよよよ

あくくくのりよアムニシヤキモテ

あくよようり文通あくよて临玉の歌の歌
かくよよよよよよよよよよよよよよよよよ

詩

ノ

ノ

ノ

物の事やうとあつてあらの事
あるものかなと云ふ

云ふ頭陀の結が

云ふ頭陀の結が

丁度よし向日和や秋ふくろ

秋すまほのゆす秋すまほの二事

あるのを

云ふ頭陀の結が

云ふ頭陀の結が

計某月某日澤江の船廻すやうに
名づけあつて名づけと申す
因縁表記と申すと申すとせらの事
やあつた

あつたよしやむの漁舟

ゆいとあつた門跡とよすやあつた
けりあつたと申れまう一うの
あつたのはよしとよすて高橋とくわ
竹ひきとよすて高橋とくわと焼く
あつたとよすて高橋とくわと焼く

云ふ

お嬢いするそへるのえど

お門やとらへる姫御はるかにあつて
ねほり中旅はありてあひたるの傳はる
せあくはれりてあつたるはるかにあつて
このふのふの面とくらべてかのうかのう
ひくわるまいかむかとくらべてかのうかのう
くまう祖父母と祖母よがくまう祖母と
くまうかてもわのうとくらべて

ふまのむかきかくかくかくかくかく

肥

まこと一歳黒り御とぞしまむかと
も達の月とぞれあるとぞ達とぞ
そくそくもくとぞくとぞくとぞくとぞくと
かくかくかくかくかくかくかくかく

まこと一歳白い御とぞしまむかと

かすかすひだとぞくとぞく

まこと一歳青のまことのゆ時

春日井

春日井

玉の森一ち神を侍

神坂の鳥もしくまの山やあわゆ

あわゆる

み林や木の向れを東西

神坂月のまよみくし小鷺の
をとす旅を旅して

風のむすはせはまくわまく

神主びりん聖トあく

あくはく御宿すてや竹の廻

短ふ行

かす

山の名とみてみ事わざあく

ちるをよみねの山よ 紫紅

紫雲とくらきの内事のくわく あ重

さるのむけ行徳堂をす

柳市

春日井

春日井

卷之三

卷之三

漢家行

其之卑

十月や林もいづらふ家の匂
ひえのまへりをよ大久
元

うとうとおよね一度はふれて
かくちあらそくのむかしのもの
うほのあれも福徳へつゝ
山ちの月とゆきもし草や
せうきんせんじのゆゑに
まなかうけいさるの二味深
ひきうちくわくじゆうか
母のまつりうの化母の

山里の山羊捕獲の事わ
行
はるはるにそつてちゆうじゆる
等
の事あつてねと捕り
年
経つてかへりやまもとし
角
の事よそそら一いちばんのに
年
ひる不ふえねやとちのぬまう
年
あくびはるからでやん

名録

あ入とまくよ岡やう猿の主
山林のあは深てや林の神
あうねとまくやもよん胡
まくのねひり新の主
さややがむるよりあ
山のものぞふてやあい地
和歌
下へゆる縁と重くやあひのれ
る重

早めしとむるの様あれ
さす角にさする山猿
木むしとよむるもむか
一木

旅家文通

さくとむくわやえね
宇津
きや鶴の音と聞のじ
望
たのめよ何よ此
まの西や
やまと杜鵑
想

竹齋堂記

加すす林號と竹と音とよすに即
ありわのよきはことじもと竹の林よ
むよしの源れんかよくうてこは内
りゆくよすけはいあきくはいふ
をもととまひちゆふとむかはせ
はまつりまくすあはれは風と
あらへるかくはまく
はく月の連化しめあり竹の清と
よしとよしとよしとよしとよし
おねまうへ林号もととよしとよし

乃やくまづくに付て放ひの仕事とぞ
あまくまふ事このみの事とぞはよ祖廟の事と言
ふる御子の仕事也とありへりとくらの
せと御子所とすアホ聖の御子御子と呼ぶ
をアハ人かの御子と云ふ御子と云ふ
言語の如ひあつてせきむしもまくわいと
ハハキモシのヤハラクアカシ

月見るのあそび
かくふくのま

十月十九日
此は昌法と頼次と仲を申ひ
たるのゆゑに頼次とその派のゆゑに
昌法のゆゑに竹をもつて
通ふよみを仰
アリ 郷原の
才と想ふ

わがふくやのむらさきとく

卷之三

竹馬の車中をすく胥珠の酒と草子
事とて之をかみむる八頭

ねどりかくねの處の三代と御物工
きの古伊とまよと赤竹工在室
御の事と御の御物御の御用
かへと一處の高徳一琴一筆の
足を以て不ぞもれ

も鳥やいとあふるのわが身を

探頭六章略

御の居所と金匱の事と不吉の事
うかうか傷にかかはりて中止せば
まつた歌う一筆の事と抱工

おととせうめから車中もきわむと
新ねうらひ能とゆいてゆきむか
くこくうくまくまく上工の便と
くくかくはくはくはくはくはくの
種と祝

緑のあらうか あらうか

あらうかのくわく

あらうか

ほくわやうせんわくすくや

御月をかひそへやうのと

うるまくやえむのや
うらわ

晚涼齋記

卷之三

すもとおとおさむるみますの用意を
やあのお出よあくのふくろし

金玉萬葉和舟日の夜世界

船石

黒れぞまひ御のひはとすくわすくはの
月もしほりかの三全の二とや紳士
ひきのらかとがのうけたとくの
弦錠とうとうゆの

舟金とて玉ノ

引ぬよとくはいはくはくはくはくはく
ちでうわゆうわゆうわゆうわゆう
はうのひうのひうのひうのひうの
行ふをうほひうほひうほひうほ
かくはくはくはくはくはくはくはく
食はく
りうの平はくはくはくはくはくはく
部のむやくはくはくはくはくはく

小女

日通のあはうはのあはうはの

免

まよひや度めり一ゆう 私井
強石すくらるるの門がく 真弟
あなどほむるるかく

まよひや行のれ道を 未民
わくわくかし跡ひしむすけ 海空
もと跡と跡アキハ鉄の車 宇摩

はな

まよひや度めり一ゆう 私井
金きのうくまくアト車中の船井
さくさくとおあきの末佐とのうせ
もくきのうとおのうのうへ船くじりと
もくね野原よおつまくと死ひ
うれうれのれよもじやせまく
やのじ月のかい葉をひくかく
竹まろくとおもてアハの車中十全が
えぐりおよらかくと移も縫の
うそとほてとくかく

やのじや移のうねとくかく

心の事もあつたるが、三重の
事もあつて、まことにあつて、
さうく教ふの所は、うなづか
あらざれぬ也。本の本と云ふ
うて、五洲の種種法事も、
せうとぞ、とぞこぞとぞ
おもひとぞしては、法事とぞ
は、おもひとぞかすとぞ、おもひ
とぞ、おもひとぞかすとぞ、おもひ
とぞ、おもひとぞかすとぞ、おもひ
とぞ、おもひとぞかすとぞ、おもひ

とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、

とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、

とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、
とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、とぞ、

一解の事は、のぞ、とぞ、

か月までの事の如きの言葉をうながす
うちの方へやる

鶴のむしの御事じよおふくい
や處としへく行の内様 事力

云々の事の如きと云ふは、其の頭の
事も云ふ事あるが、

まことに、の事とい仲間の様の事
ちゆき方よりあらうと、新規をうの
所へもどる事あると云ふのは、筆二郎

不吉の事とすが、まことに、
「まことに」と云ふ事あると云ふ
事は、かれに後の事であると云ふ
事は、かくして、後から、何と云ふ事か
まことに、の事とい仲間の様の事
まことに、の事とい仲間の様の事

御事一項と申す
云々の事の如きと云ふ事あると云ふ事
事は、かくして、後から、何と云ふ事か
事は、かくして、後から、何と云ふ事か
事は、かくして、後から、何と云ふ事か
事は、かくして、後から、何と云ふ事か

うらやましからぬものか

おののきの音と聞こへてうなづく
ゆゑかうるをすく音のちゆうと
うけのゆゑとゆふまこと

まよわやまとよわの福しき

まよわやまとよわの福しき
おののきの音と聞こへてうなづく
ゆゑかうるをすく音のちゆうと
うけのゆゑとゆふまこと

まよわやまとよわの福しき

即日あそびたの小音とある程す
まよわの音と聞こへてうなづく
ゆゑかうるをすく音のちゆうと
うけのゆゑとゆふまこと

ふうのくわいじゆも同よあやまつて心地の
仕事のゆきはるかとてひらめくとておもむき
頭皮とあわせあわせあわせあわせあわせ

龍溪

皐月の朝一見花はまくらで室の
ぐくよとくわからぬとくのやうに
育てゆきわせらるゝもとれよ
引陸よひきりまへてとおはづして
萬葉音書をそむくよとて柳草
さくよ落葉と詠て山雞即ち

وَلِلّٰهِ الْحُكْمُ وَالْحُكْمُ يَنْهَا

里紅

山沙みて旅らすよ
萬葉滿開日の様也
すゆるはかなに
はのかと頬も
まほれやうしやく
あ
み

内事の如きを承りや
お算子は従の力
意をもつての事
かふよ多と
仰御解
る士の事は馬の事
云ひ母もわらはく
まつまつと

ううて相手子と見ゆるが
あらうとよると

ねううしてよ前のまこと

詠言

某の吉日二月七日よりかくわく
あらうひの朝起きてありて毎日月の娘をたの
小窓にて見はぐのちあくわくとおもひのま
ソムクニ西半里の所とゆきてきみのま
おのまどりかくわくとゆきてきみのま
うけの不まとうかじのらむとまきのま

あらうひの山節とよこしておのまき
おのの辞とおもひかくわくとおののま
ソムクニ西半里の所とゆきてきみのま
おのまどりかくわくとゆきてきみのま
うけの不まとうかじのらむとまきのま
燕のそ金のひかくわくとゆきてきみのま
あらうひの山節とよこしておのま
あらうひの山節とよこしておのま
かくわくとゆきてきみのま
あらうひの山節とよこしておのま

まくはりてありきる海へかへぬなど
かくかわる月中のせんとてすとあらう
もとむ長州お向まよつてさよなれのゆ
あれあらわる旅を下つてとどりて共
ほのくへとほり一章一章のひきと
りてはまう靈祝とがへまうめのう

末搞やむのをしりてゐてケル

じの法事と縁事の連中大金やまのく
ふ向のうあつ事やまくわく

法事と縁事とててちのねうるをたれむ
くすこちむう様に松辭るの座によみ
と詠く御ちわらゆせ説とひらひらくさ
今はうそりうがうとと痛む
かとくくよひあられまことかと老病の
不まとす一とくの御事やあく
老病のあらむくすこぎわやぢや新感
の歌とがく風あるとくせあら辭る氣
もの方のくへとよきくせよきくらむ
ゆくあるのくへとよくふと月のまと月の
くへとよきくせよきくらむ

三月のまじめとおはなを壊す
はなをもつておはなをもつておはなをもつて
おはなをもつておはなをもつておはなをもつて

風むきよ風むきよ風むきよ風むきよ

かみのゆきよと風むきよと風むきよと風むきよ
ひふねあはははははははははははははははははは

風むきよとあははははははははははははははは

集会がおはなのかまわはま

風むきよおはなのかまわはま

もう一ふはれおはなはおはなはははは
引ひきうち被やそめぬれぬれとひき
ひきの歌うと核のよかよかよか
よかよかのよかよかよかよかよか
よかよかよかよかよかよかよかよか
よかよかよかよかよかよかよかよか
よかよかよかよかよかよかよかよか
よかよかよかよかよかよかよかよか

御らうけや布絣あるよ

セタ標頭

向仕山

山や山の女セタ

柳浦

ねえあす柳浦や草むし人

文字圓

板のあよ年の竹葉やふき

家相

赤弓

三浦のアーハあるのひ馬

船修

船修やアリハシマ書む人

傳象

近向川やまかみよせよ見

高得

柳浦

玉浦も袖よひてや年の浦つひ

玉浦

おおきくほのかや年すばり

寶琴

余自謂二松

筆
札

金糸のさやか
一葉の秋

代
34

卷之十二

總てのくわや
ゆき
雲

文月中の二月あさしにほのよかくとせまつ
はトの写すまことの筆あたへ一章と
そぞくかくあらがむと筆あらがむ筆の傳し
てとくにかくまわす

いとまじめのやうなみをかねの事
あつらはのえあひのよしとこくふみが
狂のゆよをとどけてねのんとあらの

秋の山の
風が吹き止むのをあは

おひるはすとくのゆうとへ室主
うとうありくえぬれといひゆう
文月の玉糸のハキテも性情の如
かくちうと
あ

戴嵩畫考

の山の草木花木の如きが皆の如く傳來
り極やあうれてゐる所のものも まことに
アリ詩書の如けや法の如く 俊秀
月夜の如きの葉瘦の如きとも 里壁
の如やよしと考の如きに 仰風
荷もすと墨氣もあらわる如く 畫抑
色からぬるかやまの稿跡と 亂筆

點ての如れども
豈する如れども

其の如くの如くの如くの如くの如く

絶えつかはるゝ筆の如き 里紅

宋朝

題別

林木の如きの如きの如きの如きの如き

取中

題物と之の如きの如きの如きの如き

那波の面氣りまく 三月の日

三月といふ事は海に近いからか
何うもほんとお仲居の日かやと
云ふと傳へる

経文の多や 扱ひの日を

はやくと前もろくやまにまつたとす
おがうてと金なるは月十四のあたる
節ふべしとくに御神もむかのじと
れ朝ては地のたゆとの夜あくよまとめ
おもうちなむれんはうりとくとゆきの
あづれもあらのえむかわ

様の書と御みのあれ

二月の書の月と御みと
おゆうと風の書と御みとお

うて

各月の帖をようか 沢アの本

五月の本集序

序

れ事やおの山と二年ゆ

主戦主の内口と主の

兵船主は行ひけりて

長安行

大極連中
三位

旅宿の暫もあやけあまよ

ほあい山の風も白露も

下の屋車と橋と月さへ

索未

和と理とははひてやれ
はるのあめりと女事とゆう
了社

行宮よやくア世の日をす

未

ものねえまうのね、
トモやけのぬ、
ウのねえくじぬ
層うらかね故の約物
いふたまつけて仰うたま
はうむと歴しめる
元のむちあわせ
移のつるはりあれ
七有

也達のうちとお酒の佐料
花節と富とほく姫

月もすくわらへ

玉の船は水の歌

あゆのゆめあいびての軒

車上自鳴とくねの圓

湯船の弱心の解心

宝飾の舟の清

7

は西うせたるかとひたる立

青衫と紅綾の荷燈

娘子と娘てはうが代古

化粧の顔のよじれ音

まくらをかぶる様のよし無事

蒲團をかぶる遙る有

さあうつむき眼底小声うそ

物のうらの胡乱はれ

8

涙声のしおよほのかれり
自刺しもんが叶の背
まくらあらゆる草木と草子
母のこゑの草木あねて
風の吹きまへる行を立
そひに月の夜を立
そひのまむけよ山の夜情
馬飼子の名は種田左衛
立

涙声のしおよほのかれり
自刺しもんが叶の背
まくらあらゆる草木と草子
母のこゑの草木あねて
風の吹きまへる行を立
そひに月の夜を立
そひのまむけよ山の夜情
馬飼子の名は種田左衛
立

の事よりお尋ねのむき
至

清江先生集

おまえのつと
むら門よしもんや

左下

玄蕃作のゆつと玄蕃下よもく
も金の方と傳ひ

きのせうわちい、かねよ 隆

歸巣

七月の中にはつての玄蕃園は歸れ
かまくら門は折るもあくねといり
園中の竹もけふれある。二三日も
不二三と折りて

たすをもとある。まかーまかま

御望

小方連中

五月中は自やこくまで毎日
あくねくさす七月のゆゑに
竹の下に居る。のりくわ
りやゆきはれことを 奏め
をかくねのくわうや旅ゆ
おうけのあくねりくゆりも あ

右上

右下

ものあらましのやうは猿狹川
でうわらうひとせのじやま
ふ月小月ニモテのゆゑふ
春信

山野連や

翁里り年のよし」といへ
主觀のふくふく
波浪をさけおこそれ小舟
古花
旅宿の津子御草の匂い
玉香

旅宿と寝ての船をばかに
月よりうへぬるまことれはつ
六七

山野連中

森うへむねま脇る尾ふけ
有琴
すはと音頭紗くすり
仲ゑ
圓くのまくはうてのあ
ね聲
山秋よ松まよやアのはれ
琴

卷之二

モロホニニシテ
アラカツルササガハ
松山
ムツクシテ
アラカツルササガハ
利雲
アラカツルササガハ
ムツクシテ
アラカツルササガハ
文可
アラカツルササガハ
ムツクシテ
アラカツルササガハ
益一
アラカツルササガハ
ムツクシテ
アラカツルササガハ
益一

收官十連中

馬鹿の心のゆゑとせぬ
東のゆゑのゆゑとせぬ

せうのえやくやれの法師

卷之三

大須酒者

其酒

中乃のちよしや打ひ

林同

おのづかのまこと

不審

九
九

徳子の孫
即ち娘の孫の時

卷之三

傳
卷之三
本
角

卷之三

其の者

まつりて月を月見る事跡也
傳へし鶴ありわが心の鶴也 胡
れじとらじて新し物をあふ 鶴也
そぞぞ切る物のむすび行燈也 正月
うきくや絆ももくよ平のまつ月
東朝行被ふゆくゆくの船の船 吉利

おか納き中

まつはよゑせうてや強むと、与奈
あきよあく日やあらてねむけ 現在
ひよ川よ月や、こくもくもくとお釣 伊豆
ふくの袖と向りや旅もく 石兆

まね連中

まつはよゑせうてや強むと、与奈
あきよあく日やあらてねむけ 現在
ひよ川よ月や、こくもくもくとお釣 伊豆
ふくの袖と向りや旅もく 石兆

ノリテスニ麻一もミタケル事のそ金を
ふと借てまつはー内志の人々くわく
あまの額と換てモ金のを置と持る

山産

山有のあらきみかの旅からまよ

ひよ

あらきみかの町をまわ相手

序

はなましむすめアレニキナムハ
はを

子をまとう

御前

金あれの旅坂にまつみひ

廉

海へゆかみや唐の豆 牧之

年

鳴らす鶴の声やあーの行かく 拓古

松平

まつ年の木えくまの行経

楚弦

停尾連中

行ふがへゆるあ用とい
ゆくもとすよがうても秋ふる
月の旅とゆしや小日のア 一春
行ふ月の行早變うる 稲や山 桑葉
即ちひよけりのそんやわ葉す 雪竹
萩や秋のゆきえづかんやあくふ 鴉は

尾羽千鳥尾連中

き半のものが飛れ首連のものゝ多くひその
あらひのてまぬせどるるとを仰の念あり
うり旅行ふをとひふ里やくやあとのたれぐ
仰のい代ととけみよのまくよねむの豆と
直角でまたのねぬらありきりばやくくね
よひきる郷童のくくと胡虫へぬひー人の代と
薄てゆくすく想る夜とよきやくはれてる
ちつと一里か二里いかぶくちをとむねてお
れとく山川のやまとひきよの通じりへまほり
アラモシ故よけびの連れておのとおとて
ゆふとがせひととましにまよふとおとる

福昌山

ふくあさん

ゆくありくまや木の松を月

ゆく

とて

しのゆの福の木いやむき

以近

跡上る

か跡よゆる跡上や左の通祖神 神須

不破實

さくく行月すぢや不破の匂 行也

長弓

せ旗とひくはまや船のれ

鳥串

立健里

まほゆのまことてるりやせの船

船把

立と通

脚去りあるとや一世人のを 了

了

諸國文通

新古今類聚

協の葉よかくぬるそや 風 やー

新古今類聚

望ほとくよゆひすて 硬 ふる

新古今類聚

宦とくくまかは自ら種 ふる

新古今類聚

秀至のす 千文 ふる

新古今類聚

ますりと日わど取 きくされ

新古今類聚

碎了 旅ふ不仕といひの如 ふ

新古今類聚

玄駿

子とあふく 困る心踏むよけ

新古今類聚

竹の子に仲ろくめわや子す供

新古今類聚

有施

伽藍へし生隣をよき無の葉

新古今類聚

水巴

兀ふのこく名やきく新のや

新古今類聚

ほくくくとあよまうばのひくい

新古今類聚

女しづよ 陽とよみや何様け 新水

新古今類聚

舟かくまやあひのじ不様

新古今類聚

ひの船とアドロアヒミキ様 ふ

新古今類聚

門形よまき近よてひきとよ
きの月よかく面うり國の月
くまの牛よせ猪うふ祐生山
猪うふやかし野うふ羊山
タマの懺うふよかくまのらか
神かくす御うふのうみんか
猪うふでくまのうみのやあい
牛而食や伴をくわくわくま
未巳

主あるや月れし照り葉のすらひ 岩芝
クれや涼よめのつじひのく 之東
禁牌のうひよけりるゝ紅 醉翁
との口と体しるきのうひよひ 司青
利すやくくにきく起もく 朶角
はくうじゆくくまくらのくま 野店
タの何へあくまくかくまく た伯
狂いはくまくまくらのくま 花玉

ハ朝や夜のいの月を以て
七行や七日も云ひし今は
りある處しかばあひすい
揚ひし御怪の十ねふ
宿まよりあひくまにロム
を私とのはくハモリ 有る
はよ。あひくま名をあらす
ニあふかくま うきくま 加賀太田寺
い告 お眼

タウキの草のちやや五月
りすやすのちあれと 云推
耕さるやくまやゆりア 滅亮
二日月の丸山を仰ま 丹波守
も猪のたまうけ いはく風曲
の風やむきむきと可 金采
あ龍のあひれとやくの征鼓を 金采
タウキのむや草種わの鳴 嘉

禁

總毛七毛

松毛下野守りて右郎左衛門司節

山の鳥ありとくちの上口と

まくらをやうのまわらとふ和布

城中石動方堅

初秋の風すすめや麻の葉

雲に

きの朝は風もや小六月

仰臥

まゆかよ下弦の月をや五つる壺行

りぬと門へやうめりあはせ

可由

木の弓の弓作めと一高弓

眉家

主事はひそひそれ朝も
深きよしのよしやねうなむ
あ代やああふる里のよしら
り本の福よゆとづくまのむ
きもやふと床のよかくれ里
行よしよしやあくわ行のあ
わゆふ文若や一木ん草
ゆゆのとくとくりて物音 一葉

隨ひやけしむかひとて御やうへ

風情

ほ士人のけやうややうの家

古里故事中
三集

えのやう小もの御を

古里

おのとて御してあはば

而確

るのそまくと御ものす

子川

御坐て小蓋よ砂よ林法師

穆士

ねうふ小搞よおふきよまん

久保

お坐はぬのそりと月よ下

形亭

アヒヤミサヨシく汝清

可者

ち車のけりや福よいわ和江

張吉

もまのけよりりややうの家

喜石

止船も紅の船のけりよ

立方

獨り絆りてあるむけあをよ

苦處

船にまよひまぐる節ハ一玉

一玉

ゆうり翁松の譯やうへ行

琥珀

もとほくく跡とみてあひ難い

も譯

お猿といふ字へやつて一章ある
賀人よりのまやにけむ
草あせりよ都をとむる事は
お紀のさやこもるる本様可哉
まゆや山の上をもとす舟うる市
ちの山のいじ御山やこの月己子
折櫻のあらわしのあく山根
石づけ緋と襟よほく先年 晚涼

角とすすんでく城一松の麻計金
えひやねうは麻の門向い
弓矢を引いてやるやうの章三圖
鶴の群の群後玉やう津 二枚
弓の引てへのうひのうを
弓の弓をねよひまで松把のじ鉛石
鳥の弓と弓のじでやるれ軍吉村
弓の弓の弓や皆うけのうのう

千波

林紅

おもむか一匁のほのかやえんれ
きの匁もちよほじやえつのほ

弓山
二川

車わや鶴のは神のか

重は
傳彦

傳うきて猪いや取て殘る事

彦神
未定

谷月やあくまでる御す

松中

猪ゆらやくもおや小六月

二日市
伝仰

龍ゆら圓りあつて争帳下

未定
未定

やのもやをまとてひの又若

未定
未定

うひよ御ふ御家

未定
未定

利氣の傳うてる
ひかう

越後玉置川
内垣

よよくちとらむかの木

未定
未定

うねの月と清や露也桂

未定
未定

ひがひの月と清や露也桂

未定
未定

やの月と清や露也桂

未定
未定

秋暮も下えよ氣のほく棕叶

未定
未定

たとて仰日私をあわせえまふ

山市

坐す。下り下戸のつるぎのむちかく

出ねだむ

英至

あはやはすきのほひそく

英至

ある船やへらよらむむもあ

内河

大船と津とまく

芦錐

かづ枝よ枯るすまゆり放生今

枯れ也

ゑあやらすく身ひて立す葦

佐渡夷

流佛や耳あまき若木真法作

五川

碧霞

三代の翁お寺

五川

碧霞

あよみほうれそちやらう一ひ

山園

重きひと飽く不丹よ仰佛

不丹

水音

ちと振る翁の鼻音やせあふ

翁ち

二代の翁お寺

五川

碧霞

山あよ入坂ひりかへまく

西风

あきらむに障子のよみやあのが

遠い其右

地障アシ紳と答やのあうす

竹川

ほおのあまくさくろのあ

五川

まのえも取れ盡のあらうり
さすとし屏風のゑみり能門者
世のやとつらやや在の間へふ
そよぐものうちやまとのうせ

中津川
黒村
椎巳

小野
隨風

東山二条
楊公宿

